

パネル展「地質と生活・産業との係わり」と シンポジウム「洞爺湖・有珠山との共生」 —北海道立地質研究所の「地質の日」記念行事—

鈴木 隆広¹⁾・小澤 聡¹⁾・岡崎 紀俊¹⁾・秋田 藤夫¹⁾・垣原 康之¹⁾・田近 淳¹⁾

1. はじめに

明治9年5月10日に刊行されたライマンの「日本蝦夷地質要略之圖」のタイトルの上には「北海道地質測量Geological Survey of Hokkaido」の文字がある。前身の北海道立地下資源調査所の発足から現在まで、それと同じ英文名称を使わせていただいているのが、私たちの所属する北海道立地質研究所 (Geological Survey of Hokkaido) である。そのような意味で5月10日「地質の日」は当所にとっても特別な日にあたる。

地質の日の登録を受けて、所内でも記念イベントの企画の検討を開始した。北海道はこの10年、地域経済の不振にともなう人口の社会減少が続き、昨年ついに1980年の水準である560万人にまで減少した。また、道立の研究機関にも地方独立行政法人化の波が押しよせている。そのような中で、「地質の日」を「地質」・「地質研究所」を道民の皆さんにアピールする重要な機会として位置づけて、出来る限りの取り組みをしてゆくことにした。また、並行して実施される日本地質学会北海道支部などの行事にも積極的に協力してゆくことが決まった。

いくつかの案があったが、一般の方を対象に「地質」を身近に知ってもらうための展示と、自治体職員や技術者、住民の方を対象に「地質」をいかに地域の持続可能な発展につなげるかという視点でのシンポジウムを企画した。一般の方を対象とした展示は、「地質の日パネル展—地質と生活・産業との

係わり—」として、北海道庁の道民ホールで開催することにした(写真1)。また、シンポジウムは、2008年7月に開催された「北海道洞爺湖サミット」もあわせて記念して、テーマを「洞爺湖・有珠山との共生」とすることにした。当所は毎年5月に調査研究成果報告会を

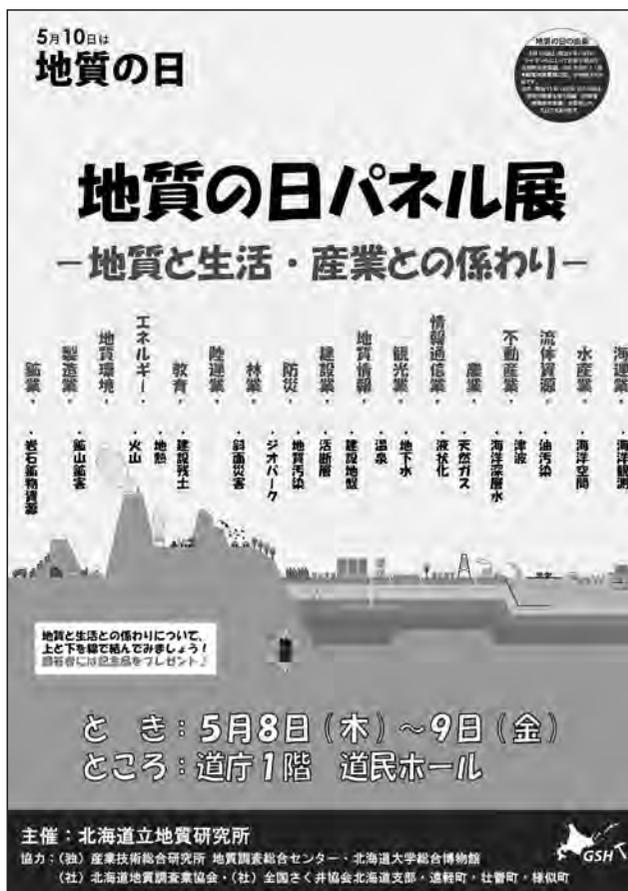


写真1 パネル展ポスター。クイズにもなっている。

1) 北海道立地質研究所
060-0819 札幌市北区北19条西12丁目

キーワード: 地質の日, 有珠山, 北海道洞爺湖サミット, 北海道立地質研究所, 持続可能な社会, ジオパーク

実施している。シンポジウムはこれに合わせて実施すると共に、成果報告会もそれに関連するようプログラムを組んだ。

2. 地質の日パネル展

「地質の日」の前日にあたる2008年5月8日(木)～9日(金)に札幌駅に近い北海道庁本庁舎1Fの道民ホールにおいて、「地質の日パネル展-地質と生活・産業との係わり-」を開催した(写真2)。この道民ホールは、仕事や諸手続きで道庁を訪れた道民の方々が待ち合わせなどに使う場所であり、道庁職員が昼休みなどに立ち寄る場所でもある。したがって、この場所は、「地質の日」「地質研究所」を広く知ってもらうには絶好の場所といえる。

展示は「地質と生活・産業との係わり」をテーマとして、「地質の日」に深く係わるライマンや明治期の地質調査と研究の歴史のほか、北海道の最も古い広域地質図(日本蝦夷地質要略之圖, 1876年)と最も新しい地質図(5万分の1地質図幅, 網走-第22号 立牛, 2008年)、産業と道民生活を支えるエネルギー資源: 石炭・石油・天然ガス・地熱、日本の地質百選とジオパーク、地質関連研究機関や関連団体の紹介など合わせて30枚のパネルである。

ゴールデンウィーク明けの2日間という短い期間であったが、700名に近い来場者があり、会場で行ったアンケートもおよそ1割の方々から回答をいただいた。回答者のうち、地質の日を知っていた方は24%であり、地質関連の出版物や北海道大学総合博物館で知ったという方が多かった。北大総合博物館では連休前から地質の日記念企画展「ライマンと北海道の地質」が開催されており、その展示とも関連した広報活動が効果的だったことがわかる。また、最も来場者の興味を引いたパネルは、このところの石油高騰の影響を受けてか、エネルギー資源(39%)という答えが多かった。会場内でも、エネルギー資源関連のパネルについて説明を求められることが多く、関心の高さが際立っていた。次いで、日本地質百選・ジオパーク(26%)、地質図(14%)、地質調査・研究史(14%)の順であった。

地質研究所に対しての要望で興味深かったのは、子供への啓発活動、中高生が興味を持てる研究、市民に親しまれる催しといった、教育・普及活動への



写真2 地質の日パネル展の様子。5月9日、道庁1F道民ホールにて。

要望が多かったことである。このような活動を通して、「地質」や「地質に関わる仕事」「地質の研究者」を知ってもらい、「地質リテラシー」の醸成や将来の地質科学の研究者の誕生に貢献したりすることも、我々、地方公設研究機関の役割のひとつであることを改めて認識させられた。このパネル展によって「地質の日」、そして「地質研究所」をアピールするという目的は概ね達成したと考えている。

3. シンポジウム「洞爺湖・有珠山との共生」

「地質の日」の翌週、5月13日(火)には午前10時から、「洞爺湖・有珠山との共生」シンポジウムを開催した。シンポジウムは、洞爺湖・有珠山地域を対象として火山、観光、防災、資源および環境をキーワードに、持続的発展が可能な地域社会の構築に向けての課題や展望を議論しようというものである。あわせて午後からは、それらの地域に関連した発表を中心に地質研究所平成20年調査研究成果報告会を開催した(写真3)。場所は札幌駅北口に近いエルプラザ3Fホールである。シンポジウムと報告会には、一般の方々をはじめとして、関連した民間企業や自治体の方々など約150名の参加をいただき、盛況のうちに終了した。

基調講演の岡田 弘北海道大学名誉教授は、火山を知り、うまく付き合うために必要な人づくり、そしてネットワークの大切さを強調された。また、噴火や地殻変動をジオパークとして観光に生かしてゆくために

シンポジウム「洞爺湖・有珠山との共生」
&
北海道立地質研究所 平成 20 年 調査研究成果報告会



日時：
 2008 年 5 月 13 日
 (火) 10:00-16:15

場所：
 札幌エルプラザ
 3 階ホール
 札幌市北区
 北 8 条西 3 丁目

入場無料

シンポジウム「洞爺湖・有珠山との共生」 10:00～12:20
 —火山・防災・観光・資源・環境をキーワードに地域社会の持続的発展を考える—

基調講演 岡田 弘 北海道大学名誉教授
パネルディスカッション

コーディネーター 北海道立地質研究所長
 パネリスト 岡田 弘 北大名誉教授、
 長崎良夫 洞爺湖町長、若狭洋市 洞爺湖温泉協会会長、
 川南明則 洞爺湖温泉利用組合代表理事 ほか

平成 20 年 調査研究成果報告会 13:15～16:15

口頭発表 (略題) 温泉資源の多目的利活用に向けた複合解析/有珠山西山地区の温泉開発可能性/洞爺湖の湖底は何を語るか—音波探査から—/洞爺湖の水質保全のための坑廃水対策/洞爺湖東方変質帯地域岩石の重金属含有量と溶出特性/噴火湾の堆積物特性と底質環境/石狩湾岸地域の地下水モニタリング

ポスター発表 (略題) 地質図幅「立牛」/上川地方南部の地質/北海道の未利用砕石資源/「間寒別断層帯・幌延断層帯」/岩盤崩落/2007 年登別温泉「泥混じり熱水噴出」/函館の温泉資源適正管理/礼文島の温泉開発/釧路温原周辺湧水/堆積学的帯水層評価/人工湿地を用いた酸性廃水処理/勇払低地形成過程/大樹・鹿野海域の地質/地中レーダー

問い合わせ先：北海道立地質研究所 企画調整部 研究企画科 TEL 011-747-2437
 ホームページ：<http://www.gsh.pref.hokkaido.jp/>




写真3 記念シンポジウムのポスター。

も、科学的なきちんとした研究とそれに基づく解説が重要であり、それが地質研究所など地域に根ざした研究機関の役割のひとつだと指摘された。

引き続きパネルディスカッションでは、当所所長の藤本和徳がコーディネーターとして、岡田名誉教授のほか、長崎良夫洞爺湖町長、(社)洞爺湖温泉観光協会の若狭洋市会長、洞爺湖温泉利用協同組合の川南明則代表理事、そして当所環境地質部長の田近の5名が、パネリストとしてそれぞれの立場からの展望と課題について発言した。長崎町長は新たに策定された町総合計画での将来像「湖海と火山と緑の大地が結びあい元気をつくる交流のまち」について説明し、火山や地元資源を利用した産業の振興と防災体制の

充実について考えを示された。また、各パネリストは、温泉の癒しや、エネルギーとしての利用、滞在型体験型観光をめざした噴火遺構を結ぶフットパス事業など火山の豊かな恵みを生かす一方で、火山マイスター制度をはじめとした人づくりや施設整備などによる噴火への備えなど、今後地域づくりを進めてゆく上では様々な課題があることを指摘した。また、その解決には基礎的な地質の研究やその応用研究の役割が大きいことも指摘された(写真4)。

午後からは、成果報告会が開催され、有珠山山西火口周辺の熱水系の研究、噴火湾の環境、鉦山鉦害と洞爺湖など環境地質分野および洞爺湖関連の研究7件の口頭発表と、最新成果14件のポスター発表



写真4 地質の日・洞爺湖サミット記念シンポジウム, 5月13日, 札幌エルプラザホール.

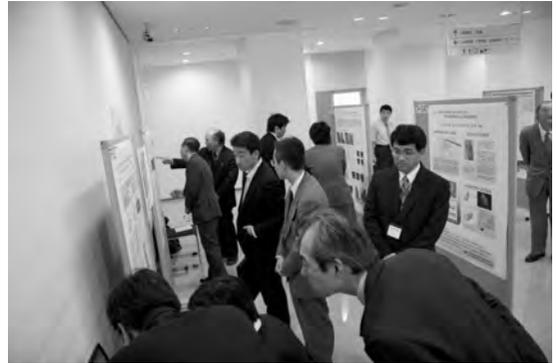


写真5 成果報告会ポスター発表の様子. 札幌エルプラザにおいて.

が行われた(写真5).

4. 終わりに-継続は力なり

札幌では、「地質の日」を含む一ヶ月間は、日本地質学会・日本応用地質学会の各北海道支部、地質調査業協会および当所を始めとする関係団体の共催協力による地質の日関連行事がどこかで開催されているという状況であった。このように各団体や機関が連携して協力して実施できた背景には、前年の「北海道ジオウィーク2007」の経験が大きい。北海道では2007年9月上～中旬に、全地連e-フォーラム、地質情報展2007、日本地質学会年会など地質関連の学会や見学会、イベントが集中して開催された。この際に地質学会北海道支部を中心に各団体・機関が共同で広報活動を行ったのが「北海道ジオウィーク2007」の活動である。今回はその経験も生かし、これに劣らぬ連携のもとに行事を開催することができた。

今後、これらの行事をどう発展させて継続させて行くのか、イベントを定着させるまでには継続が必要である。北海道立地質研究所では関連学会・団体との連携のもとに、次回のイベントを検討してゆく予定である。

謝辞: 展示したパネル、および作成したパネルのデータは、(独)産業技術総合研究所地質調査総合センター、北海道大学総合博物館、(社)北海道地質調査業協会、(社)全国さく井協会北海道支部、遠軽町、壮瞥町、様似町から一部協力をいただいた。厚くお礼申し上げます。

SUZUKI Takahiro, OZAWA Satoshi, OKAZAKI Noritoshi, AKITA Fujio, KAKIHARA Yasuyuki and TAJIKA Jun (2009): Anniversary events of Geological Survey of Hokkaido for Geology Day.

<受付: 2008年10月1日>